The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	最近二三十年中中國新發見の學問(上)
Author(s)	王, 國維
Citation	懐徳. 1926, 4, p. 1-2
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/88720
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

教育と進修に就て　稲田博士
研究室より　山本檢信

懷德

第四號

大正十五年五月十五日印刷
大正十五年五月二十日發行
發行兼編輯人　小沼直平
印刷所　太陽日報社
大阪東區擬後町懷德堂內
發行所　懷德堂堂友會
電話東三五五番

藝文

最近二三十年中 中國新發見の學問（上）

王國維

譯者云、先生名は國維、字は靜安、觀堂と號す、浙江海寧の人、博く經籍に通じ特に金石學に深い。今北京清華學校の教授である、本篇は最近順天時報に登載されたものである。

古來新學問の起るは、大抵新發見による。孔子壁中の書が出てから後（山東曲阜縣に出づ）漢以來の古文字がある。趙宋の古器が出てから宋以來の古器物古文字の學がある。ただ晉時に汲冢の竹簡出土後即ち永嘉の亂があつた爲に、其の結果は甚だ著はれないが、併し同時に杜元凱が左傳を注し、少し後になつて郭璞が山海經を注して、已に其の說を用ゐたので、紀年に記す所の禹、益、伊尹の事は今に至つて歷史上の問題となつて居る。

然れども中國紙上の學問が地下の學問によることは、固より今日に始まつたのでない。漢以來中國學問上の最大發見は左の三つある。

一、孔子壁中の書
二、汲冢書
三、今の殷虛甲骨文字、敦煌千佛洞の六朝及び唐人寫本書卷、內閣大庫の元明以來の書籍檔冊

此の第三の四者は、その一つでも已に孔壁や汲冢から出たものに當るに足るもので、而も各地零星發見の金石書籍で學術に大關係あるものは、尙ここに與からぬのである。故に今日の時代は、これを發見時代と謂ふべきで、これまでから未だ能く比較になるものがないのである。よつて今此の二三十年發見の材料並に學者研究の結果をもつて、五項に分つて、これを說明しやうと思ふ。

第一　殷虛甲骨文字（又は龜版と稱す）

これは殷代に於ける卜時命龜の辭で（孔を鑽ち火を以てこれを燒き其の裂紋を視て問ふ所のことを版上に書く。祭祀、征伐、漁獵、晴雨等の如きもの）龜甲及び牛骨の上に刻した者である。これが光緒二十四五年の間に（西曆紀元一八九八—一八九九）始めて河南省彰德府の西北五里の小屯から出た。其の地は洹水の南に在つて、水で三面これを環らして居る。即ち史記項羽本紀に謂ゆる洹水の南殷虛上なるものである。（按ずるに、宋に河亶甲城の名がある、此れ即ちその地で、殷の都朝歌は古書に謂ふ即ち衞輝である、而して竹書紀年は即ち彰德と謂つて居る）要するに殷虛といふは、都城一部包む所の名である。龜版中にはまた商帝王の名が多いから、出土の地は即ち殷の都であると斷定することが出來る。初め出土した後、（時に土人は認めて龍骨だといひ瘡を治するに用ゐて居たが後乃ち古董客の手に入つた）維縣の商人が其の數片を得て、以て福山の人王文敏（懿榮）に賣つた、聞く所によると、每字銀四兩に賣つたといふことである。文敏は其の事を秘密にすることを命じた爲に、一時出づる所のものは、前後皆これに歸した。所が文敏は庚子の難（譯者云即ち明治三十三年北淸事變）に殉じたので、其の所藏は皆丹徒の人劉鐵雲の手に歸した。鐵雲はまた商人に命じて、これを河南に蒐めさせたので、其の藏する所四千片に至つた。光緒二十八年（譯者云明治三十五年）に劉氏は此の內から千餘片を選んで、影印にして世に傳へた所謂鐵雲藏龜是れである。同三十二年に上虞の人羅叔言參事が始めて京師に官たる時、また商人をして大にこれを蒐めさせた。是に於て三十二年以後出づる所のものは多く羅氏に歸した。三十二年から宣統三年に至るまで得る所二三萬片である。而して彰德長老會牧師メンチースが得る所もまた五六千片、其の他各家に散在するもの、尙一萬片に近い。（總計已に出土したもの約四萬乃至五萬片である）最近十年中は乃ち復び出ないが、中には僞造するものがある。そこで此の類の文字を著錄するの書は、戩雲藏龜の外、羅氏の殷虛書契前編（民國元年十二月、譯者云、八卷四冊）殷虛書契後編（民國五年三月、譯者云二卷一冊）殷虛書契菁華（民國三年十月、譯者云、一卷）鐵雲藏龜之餘（民國四年正月、譯者云、一卷）日本林泰輔博士の龜甲獸骨文字（三年十二月）メンチースの殷虛卜辭（千九百十七年上海別發洋行出版）哈同氏の戩壽堂所藏殷虛文字（民國六年五月）凡て八種である。

而して其の文字を研究するものには瑞安の人孫仲容刑部（詒讓）が始めて光緒三十年（譯者云明治三十七年）に於て契文舉例を著はした（原稿は曾て劉鐵雲に寄せた、越えて十三年（譯者云、即ち民國六年）余は其の手稿を上海に得て、上虞の羅氏が刊して吉石菴叢書第三集に入れた）羅氏はまた宣統二年に於て殷商貞卜文字考釋（譯者云一卷）嗣いで殷虛書契考釋（民國三年十二月、譯者云、一卷）殷虛書契待問篇（民國五年五月譯者云一卷）などを著はした。（諸書は詳に筆畫を考へ、審重の態度をもつて疑はしきものは缺いた。間また附會があるけれども、併し十の六七は確鑿信ずべきものである）商承祚氏の殷虛文字類編（民國十二年七月）は復び材を羅氏に改定の稿に取つたもの（說文の次序を以てこれを排列し、較據るべきものであるが、ただ摹畫未だ眞ならざる嫌がある）而して戩壽堂所藏の殷虛文字は、余もまた考釋（民國六年五月）あり、此の外孫氏の名原（譯者云二卷一冊）も亦頗る審かに甲骨文字を釋いてあるが、併し其の契文舉例とは、皆僅に鐵雲藏龜によつてこれを爲つたものだから其の說武斷がないではない。文字を審釋するは、矢張羅氏を以て第一とする。其の小屯が故の殷虛であることを考定し、及び殷帝王の名號を審釋したのは、皆羅氏からこれを發したもので、余もまた此の種の材料により、殷の卜辭中見る所のものに就て先公先王考を作り、以て世本史記の實錄たることを證し、且つ其の舛誤をも辨することにした。また殷周制度論を作り、以て二代の文化を比較した併し此の學問中には研究發明すべき處が尙多いから、此の努力は後人に待たなければならぬものである。

第二　敦煌塞上及び西域各地の簡牘

漢人木簡は、宋の徽宗の時已に陝右からこれを發見した。（僅に二簡である）靖康の禍に金人の爲にこ

れを索め去られたが、光緒の中頃に當つて(千九百年—千九百一年)英國印度政府派遣する所のハンガリー人スタイン博士が古を我が和闐に訪ふて、尼雅河の下流廢址に於て、魏晉間の人が書いた所の木簡數十枚を得た。嗣いで光緒の末年(千九百〇六年—千九百〇八年)前後して羅布淖爾の東北故城に於て、前後晉初の人が書いた木簡百餘枚を得た。(原物は均しく英國博物館の收藏に歸した)是は皆佛人チャバンス教授の考釋を經て、其の第一次得る所は、ス氏の和闐故蹟中に印せられ、第二次得る所は別に專書となり、民國二年三年の間に出版された。此の項木簡中には古書(蒼頡篇急就篇等)曆日方書があるが、其の大半は皆屯戍簿錄である。(また公文案卷信札等もある)史地二學に於て關係極めて大なるものである。民國二年の冬チャバンス教授は、其の校訂未印成の本を羅叔言參事に寄せたので羅氏は余と與に重ねて考訂を加へスタイン氏が和闐に於て得た所のものとを併せ、景印して世に行ふた。所謂流沙墜簡(民國三年四月出版、譯者云三冊)是れである。此の外露國人ヘドニーも亦得る所があり、また日本人大谷光瑞が得る所西域圖譜一書がある、併し其の中木簡はただ吐魯番の二三枚のみである。(未　完)

始皇本紀を讀みて

院儒史實の一說に及ぶ

今西　茂喜

司馬遷の秦及始皇本紀を叙するや筆意高遠、行文明潔、殊に豪邁果敢の始皇の爲人を以てして、其潑剌たる性情を發露するの文中、鬼氣ありて宛然眼中其人を見るの思あらしむ、現に帝の果斷の態を形すに、往々(怒)(大怒)の文字を冠して、以て四圍の史實を躍動せしむるの妙、不覺打案快を呼ばしむるものあり、素是れ先天的貴族の出として、遙蕩悉睢小節に拘拘たらず、遠大の希望を懷くの半面には直情徑行後圖の慮少く、爲めに享國の多祚ならざりしは痛惜に堪へず、其偉勳中屈指すべき(一)僅々十三歲にして即位し、爾後十年にして六國を戡定し、(二)李斯、尉繚子等の俊才を任用し國政に與からしめ、周公の制せし謚號を廢して君臣父子の大義を絕對ならしめ、以て自から古を成し、文化革新に急なる、大篆に代ふるに小篆を以てし、更に程邈を獄中より起して隷書三千字を制せしめ、直に之を御史に擢用し、(三)燎毒の亂に一朝の怒に乘じて大后を遷したるも、一布衣茅焦の諫を容れて大后を咸陽に遷し奉り、(四)居常敬神の念に篤く、雲夢に舜帝を望祀し、會稽に大禹を祭り、而して大風の爲に苦しめられし湘君の祠は舜二妻を祀ると聞きて、直ちに全山を赭にしたると、神仙に憧憬の餘、徐福をして齊の童男女二千人を齎戒沐浴せしめ、吾邦に渡航せし敬虔の態度と、(五)國論統一の必要上、博士官の外詩書百家の書を藏するを禁じたると、盧生侯生等の始皇の旨に忤ふに及び、諸生等を案問するに(諸生傳相告引、乃自除者四百六十餘人)見て、彼等の腐腸敗肝を憤るの末、之を阬殺せり、余思ふに、始皇の爲政の上乘なるもの坑儒實に其一に居るを而して坑殺方法に至つしは古來史傳無し、余頃日東坡詩注を讀み、一詩を得て之を知り、不覺掩卷痛快を叫ぶに至る、

飲酒臺　　蘇東坡

博士雅好飲。空山與誰娛。莫向驪山去。君王不喜儒。

注史記所載坑儒、止曰坑之咸陽而歐陽率更疑於瓜部中、載古文奇字云、始皇密令人種瓜驪山研谷中、瓜實成、令人上書曰、瓜冬有實、有詔下博士諸生、說之人々各異、則皆使往視之、而爲伏機、諸儒生皆至方相難不決、因發機從上皆壓殺、

秦皇由來超世的大偉人にして、當時の凡庸國民に君臨するには、餘りに賢明の天子たりし也、故に博士輩の嗷々の聲に耳を假して國政を料理するは不可望の事に屬す、其上彼等の資性墮劣怯懦にして、不足恃事は疾に皇帝の看破する所にして、焚書坑儒固より必然の處置として當然謳歌すべし、後世儒者の下せし(暴秦)又(虎狼秦)の評語は失當の極と謂ふべく、但、遷也時に此口吻無きにあらざるも、是斷じて遷の本意にあらず、何となれば、遷也漢の深讐たる始皇並項羽等を本紀に列し、高祖と同格の班に就かしめ遠く三王五帝の德に配せしめたるの眞意は、董狐以來の良史として、漢廷に對する諷示を該ね、威武不可屈の志操の皓潔を表するものと解すべく、之に比して、吾山陽外史の豐臣氏を傳するに、之を德川氏前記に班したるの態度を見るに、正に霄壤の差あるを覺ゆ、

今古不世出の英主を傳するに、雄大豪俠の靈筆を以てす、宜矣其雄魂をして萬古灰ならず、筆端の呵する處紙上聲あらしむ、東坡の一詩亦能く英雄の心事を解するを見る、卑見庶幾は誤なからん乎、謹で教を君子に請ふ、(第五十一議會閉會當日記)

教育と進修に就て

稻田　穰

頃日學年替りの場合、例の中等以上の諸學校に於て、選抜試驗の混雜は相變らずの次第にて、言はゞ己れの學才抔には全く頓着せず、猶も杓子も、家庭の事情相許す限り、男女となく、無暗と高級校の入學を志望するの有樣にて、其學校卒業後の處世方針抔に到ては、本人は固より父兄に於ても、未だ全く決定し居らず、加之彼等中には、中學校教科の性質すら能くは辨知せず、兎に角中學丈は卒業せねばならぬと爲し、甚しきは、高等小學校二ヶ年の代りに、切ては其の二年丈にても、中學若は女學校へ入れたしと希望するものさへあり、誠に笑止の至なり、余曾て地方郡宰の職に在り、當時の事情今日に相及ばざる遙かなるものありしに不拘、余は切に此の無意義なる向上心の勃發を憂ひ、懇ろに中等實業教育の奬勵に努め、就中高等教育を慾求するものと雖も、可成專門學校に向ふを期せしめたりしが、目今の情況は層一層益々其弊に堪へず、兎に角大學に入らずんばの意氣込愈々盛なるものあるに至れり。

而して其大學や專門校の卒業者は如何にと見るに、近來の如くにては職業の選擇抔無論本意に任せず、辛くも何等かの職務に在り附くを以て滿足せざるべからず、甚しきは實業側の如き、學歷の高き丈就職の難きを加ふるの有樣にして、科學的智識を職務上に應用するが如きは、到底望むべきにあらず、要するに學歷は求職の場合、履歷書を飾るの一要具に過ぎずして、今は却て其高ければ高き丈就職難を加へて、全く自繩自縛の感なき能はず、殊に女子に在ては女學校は先づ可なりとするも、高等の教育を加ふるに隨ひ、反比例に、婦德上如何敷行動相現はれ、遂に家庭にさへ容れられ難きものあるに至るは浩歎の外なしとす。

如斯は現行制度に於ける文官任用令なり、官公吏登庸上の手續、又は試驗規則の不備不用意の結果に